

平成 27 年 1 月 17 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム

平成 27 年度第 1 回

「しみじみ」のやりとり

昨年暮れ、木内孝顧問の事務所に伺いました。来年はどういう時代になるか、我々がどういう心持ちで向かって行けばよいか……という会話の中で、「しみじみ」という言葉が話題になりました。しみじみと今年（昨年になります）一年を振り返りました。生き死について考えさせられた事をはじめとして、色々な事がありました。

そうしましたら大晦日に木内顧問からメールを戴きました。顧問の会社の今年のテーマを「しみじみ」に致しますと発表したら、「そういう言葉は弱い！」と怒鳴り込んで来た株主さんがおられたそうです。頼もしい限りだと書いてありました。また、「しみじみについて深澤さんのお考えをお漏らし下さい」とありましたので、私は「しみじみという言葉は、人間が旬を迎えて身に付いた実力を大いに発揮できる年代に入り、尚且つ、心が豊かな状況になっていないとなかなか味わえません」と返信致しました。

木内顧問は二月にインドで開催される集まりで「しみじみ」をテーマに話をされるそうです。「silence is the most powerful sound」という言葉で話を始めると書いてありました。また、お父様である信胤先生が言っておられた「一葉散って天下の秋を知る」を、信胤先生がどう英訳したか探してみてもありました。

葉っぱが一枚ひらひらと落ちてくるのを見て、「ああ、秋だなあ」としみじみ感じる。日本人にはそういう感受性があります。他の国にはありません。日本とは素晴らしい国だと信胤先生はよく言っておられました。そこで私は、西行法師と良寛の和歌を返信しました。

なにごとのおはしますかは知らねども かたじけなさに涙こぼるる 西行法師

日本人なら説明しなくても、神社仏閣に行ってお参りをすると何となく畏敬の念で心が引き締まって、しんと静まるものです。どなたが祀られているか分からないけれども、自然と頭が下がって敬虔な気持ちになる。日本人はそういう民族だと思います。

焚くほどは風がもて来る落ち葉かな 良寛

私が煮たきするくらいは、風が吹くたびに運んでくれる落ち葉で十分間に合う。知足の心をしみじみと味わえる句です。これらの句を色々な角度で説明すればお分かり戴けるでし

よう、とお伝えしました。

木内孝さんは以前、イギリスの議会で要請されて、日本を代表して英語で日本国・日本民族について説明して来られました。日本民族は「足るを知る」を実践している民族です。日本は必ず復活しますと話されたそうですが、今度はどう説明されるでしょうか。

私は以前から、資本主義は終わり知足主義の時代が来るとお話しております。今年は、もう資本主義が終わるのは自明のことですから、次は何の時代になるかが話題になる。そういう時期に入ったと感じています。言い方を換えると、お金が力を持ち、お金で色々なものが買える時代は終わりです。人類の最大の発明と言われるお金という仕組みは、もう末期です。お金がお金として機能しなくなっているということは、それぞれの経済学の専門家が色々な形で今年を言うことになると思っています。私は昔、木内信胤先生から「今の経済学はもう終わり。経済学は破綻しているから、経済学でものを考えてはいけない」と教えて戴きました。経済学はまだありますが、ケインズは終わりだと明確に言うておられましたし、私もそう思います。そして人類史上最も素晴らしい時代は、日本の江戸時代末期だと考えています。

中斎塾フォーラムの展望

中斎塾フォーラムは、二年後の平成二十九年三月に創立十周年を迎えます。出来れば記念式典を開催して、そこでいくつか発表したいと思っております。一つは、さつま芋栽培への取り組みです。日本は終戦直後と同じような食糧事情になる時が来ると考えています。皆さんが餓えずにすむよう、私の家庭菜園の師匠である神藤評議員会議長さんに、さつま芋の栽培方法等について話をして貰いたいと思っています。今月末、元川越サツマイモ資料館の館長で、日本いも類研究会の井上会長にお会いする予定です。終戦直後、特に東京は食糧事情が極度に悪化して、国民は芋によって命をながらえることが出来ました。井上会長は、〈これから日本人が餓える時代が来る。そのためにさつま芋を普及させたい〉と使命感に燃えて取り組んでおられます。是非お会いして具体的なノウハウをお聞きしたいと思っています。

もう一つは、モンゴルとの交流です。昨年十月にモンゴルで講話をさせて戴きました。我々が学んでいる知足や東洋学、具体的には論語については是非教わりたいということですから、応援をしたいと思っています。モンゴル委員会も発足しましたので、今後お付き合いを進めていくなかで、交流状況や将来の展望について報告したいと考えています。

具体的にはこの二点を考えていますが、これから準備委員会を立ち上げて、二年間かけて、どういうことを準備するかを決めて、発表実行したいと考えています。その頃は、も

うアベノミクスが失敗したということが明快になっていて、次の動きがどんどん出てきている状況でしょうから、今からそれらを踏まえて学びを深めて実行していくことは相当貴重なものになります。

人は、その性格に合った事件にしか出会わない

今日ご紹介する本は、城山三郎さんの『少しだけ無理をして生きる』（新潮文庫）です。城山三郎というペンネームは、名古屋の城山という所へ三月に引越しをしたので、そう名付けたのだそうです。『文学界』という雑誌の新人賞受賞の電報が届いた時、城山三郎さんは風呂に入っていて、ペンネームを知らない奥様が風呂場に聞きに来なければ電報は宛先不明となって、作家になっていなかったかもしれない…とご本人は述懐しています。

この本の中に「人は、その性格に合った事件にしか出会わない」という文章があり、非常に共感しましたので本日のテーマに致しました。

昔、「こんな女に誰がした〜」という歌がありました。しかし、そうではありません。〈こういう事件があったから、こうなった〉のではなく、〈こんな女だから、こういう事件があった〉のです。例えば、あなたが事業を手掛け発展させて、きちんと継承させたとします。そうすると周りの人は、〈いいなあ、どうしてこういう人生を歩んでゆけるの〉と思うでしょう。しかし、こういう性格の人だから、こういう事業を選び、そして発展させていったのです。城山三郎さんは洪澤栄一を挙げて、彼の吸収してやまない、建白してやまない、人を結びつけてやまない、そういう性格が「パリ行き」という事件と出会わせ、有名な下水道やガス管の視察などの経験をさせたと書いています。

テーマにあわせてもう一冊、洪澤栄一の『論語講義』をご紹介します。その中に次のような記述があります。

我が邦明治中興の清明、実に聖天子は申し上ぐるまでもなく、大小の官吏みなその身を正しくして事に従い、以て前章に述べたるごとく、僅々三十年にして国運の隆盛を致せり。爾来ますます奮励して文化普及し、世界強国の一に列し、外国貿易また発達し大正三年欧州の大戦勃発するや、兵器その他の輸出とみに増加し、五年の輸出超過三億八千三百万円、同六年五億八千七百万円、同七年三億二千万円に達するに及んで、官民ともに黄金の波に酔えるがごとき想いをなし、奢侈贅沢の風を馴政し、官紀は紊れて大小官吏の犯罪続出し、奢侈品の輸入いよいよ増加し、大正八年より輸入超過に傾き、同年の輸入超過は四千五百円に止まりしが、漸次増加して大正十三年は九月末までに六億三千三百万円に達し、国債もまた大正五年は二十四億六千八百万円な

りしが、政友会積極政策の資金も加わりけん、大正十三年九月末は五十億五千百万円に達す。その利子年々二億五六千万円を要し、人民の頭割りにすれば、一人につき毎年三十五円強の利払いを負担せざるべからず。かかる状態ならば、国の信用薄くなりゆき、現に大正十三年、八朱以上高歩の国債を米国にて売り出すことの余儀なきに至れり。即ち身代傾きて、人、金を貸さずなれるなり。今に^{およ}迫んでこれが挽回策を講ぜざれば、一国破産の悲境に陥る日あらん。

簡単に解説します。明治の御代になって、天皇陛下は勿論のこと役人も身を正して一所懸命頑張ったから、わずか三十年で国運が隆盛し、文化も普及して、小さな東洋の小国が先進国の仲間入りをした。外国貿易も発達し、大正三年に欧州の大戦が始まると武器の輸出が増えて輸出超過となり、ますます国が儲かって、役人も事業家も黄金の波に酔っぱらったようであった。皆が贅沢極まりない生活を始め、官紀は乱れて汚職が蔓延した。贅沢品が外国からどんどん入って来るようになり、大正八年からは輸入超過になり、大正十三年には政治家がどんどん積極財政をとったので国債はべらぼうな金額に達し、国民一人あたりの利子は毎年三十五円の利払いを負担しなくてはいけなくなった。国の信用がなくなり、国債をアメリカで売らざるを得なくなった。こんなことをやっている、国が潰れることになる。

そう渋澤栄一は憂えています。今の時代と同じような状況です。更に、

これ加藤高明内閣が同年七月二日成立以来、鋭意官制を改革して大いに官吏を淘汰し減員6万人に及び、歳計予算を縮小して、二億五千万円を減額する所以ならん。幸にしてよく綱紀を肅正し、大小の官吏公吏、身を正しうして、政務に従わば、民風また質実剛健の昔にかえり、ますます国家発展の域に^{いた}躋らんとす。

と続けています。

大正十三年に発足した加藤高明内閣は、今で言えば自民党と民主党と維新の会が一つになって連合政権を作ったような、強力な布陣でした。そのデフレ退治の仕方は、当時の国家公務員六万人の首を切って人件費をバサッと削り、予算も削ったわけですから大した改革だと思えます。加藤高明内閣がどういう政策をしたか、今の内閣と照らし合わせて調べてみるとよろしいでしょう。

加藤高明について渋澤栄一はこんなエピソードも書いています。渋澤栄一が開催した加藤内閣を応援する経済界のパーティーの席上、加藤首相が「応援してくれるのは有難いが贅沢なパーティーをやられては困る」と挨拶をしたので、渋澤栄一は「我々経済界は贅沢なものは食べておりません。ほんの少々つまみと、ほんの少々アルコールがある質素な集まりで、加藤内閣を応援します」と返したそうです。今の経済三団体、経団連・商工

会議所・同友会はどうでしょうか？ 少なくとも渋澤栄一が加藤内閣を応援したパーティーよりは、はるかに豪華な食事を出して安倍首相を応援しているだろうと思います。

加藤高明にしても渋澤栄一にしても、その性格にあったことしかしない。その性格に合った事件が自然と寄ってくるのだと考えます。お二人とも素晴らしい人物だからこそ、素晴らしい事業・業績を残したのだと思います。

他にも、城山三郎さんはこの本の中で、真のリーダーの姿としてライオン宰相として名を馳せた浜口雄幸について書いています。特に、浜口雄幸が井上準之助を口説いた時の台詞が印象的でした。浜口雄幸が総理大臣に就任した時、このデフレを乗り切るには財政の専門家が要ると井上準之助を大蔵大臣に抜擢しました。経済を縮小し、人員整理をし、国家予算を縮小するデフレ政策を推進して、「自分は殺される覚悟である。自分と一緒に死んでくれないか」と井上準之助を口説いた。そこまで見込んでもらえるならと井上準之助は引受け、経済政策を断行していったわけです。実際、浜口雄幸は東京駅で銃撃され、その傷がもとで死んでいます。その頃の政治家は、殺されるのを前提にことにあたっているわけですから、大変な時代だったと思います。

ちなみに渋澤栄一さんが明治政府に仕えた時も同じで、大隈重信から「新しい時代、新しい政府になって誰も経験者はいないのだから、皆で力を合わせて、八百万の神々の人柱となろう」と口説かれたという話は有名です。

浜口雄幸の葬儀の際、井上準之助は玄関を開けるなり号泣して入ってきたそうです。「冷静で合理的な井上さんが、まるで肉親を亡くしたように号泣されたので、井上さんと父との間にはずいぶん深い心の付き合いがあったんだなあと、初めてわかりました」と娘さんの言葉が書かれています。実際、二人は個人的な付き合いはなかったそうですが、お互いに力を最大限出し合える友がいるというのは凄い事だと思います。一生の間に、一人でも二人でも真の友を作れるとよいですね。

浜口雄幸はピストルで撃たれたあと病床にありましたが、内閣総理大臣として国会に出て演説をしなければなりません。野党からは、国会に出られないようでは政権を渡せと迫られる。医者には命の保証はないと言われましたが、〈会期中に国会に出るという総理の約束は国民に対する約束である。自分は死んでもいいから国会に出て約束を果たす〉と決断します。しかし玄関で靴を履くと、重くて歩けなかったそうです。娘さんと奥様とで布を靴の形に切って、墨を塗って足に付けて、それで国会に出ました。その後、少しして亡くなっています。ですから本当に政治に命をかけていたわけです。

他にも『少しだけ、無理をして生きる』には、広田弘毅や吉田茂のエピソードなどもあって、実に具体的で分かり易く書かれていて非常に良い本だと思います。最後にもう一つ、この本に書かれている「人間を支える3本の柱」についてご紹介します。

一つは、自分自身を豊かにする自分だけの世界、自分を耕す時間を持つ。これは壺中有天の時間を作りなさいということだと思います。

二つ目は、肉親・家族・友人の縁を大事にする。まさに安岡正篤先生の言われた縁尋機妙です。

三つ目は、志を持つ。目標をしっかり持つことがその人物を育てるのです。

城山さんはこの三つ、自分を磨く時間・世界を持ち、縁を大事にし、自分自身の目標を持って生活したのです。城山さんの持った目標設定が、タイトルの「少しだけ無理をして生きる」だったのです。これは城山三郎さんが作家になった時、一橋大学の先輩である伊藤整から「あなたはこれから先、プロの作家としてやっていくのだから、いつも自分を少しだけ無理な状態の中に置くようにしなさい」とアドバイスされたのだそうです。この言葉が生涯作家を続けて行く時の大きな励みになったそうです。少しだけ無理な目標設定で書いているから、それなりの量が増え、作品の幅も出るし、作家としての成熟も出来た。少しだけ無理をすることの経験がその人を豊かにし、周りもあたためるということです。皆さんも少しだけ無理を試してみることをお勧めします。

クンバハカの実践

では、恒例の質問に参りましょう。

- 今年に入って、嘘をつかない日が多かった方
- 今年に入って、良い日が続いている方

良い日が続く人は、良い循環が回っているということです。先ほど開会挨拶で猪瀬理事長が言われた「多逢聖因」ですね。良い出来事に出合うには、良い人に会えばよい。良い本だと思えば読めばよい。良い場所だと思えば行けばよい。それが巡り巡って良い循環が起きます。

- 今年に入って、有難うと言ひ、有難うと言われることが多い方

先日、上野東照宮のぼたん苑に行きました。そこに貼ってあった「ありがとう」という神社本庁のポスターが目にとまりました。

「ありがとう」

太陽に、光に、この星の温かさに、ありがとう。

雨に、川に、きれいな水に、ありがとう。

大地に、杜に、お米に、ありがとう。

祖先に、父に、花に、私の命に、ありがとう。

大切なものは、あなたのそばに、あたりまえにあります。

最近、あなたは何に感謝しましたか？

「ありがとう」

世界でいちばん大切なきもち。

我々は当たり前前に「有難う」と言っていますが、最近は「有難う」と言わない人が増えてきているのだと感じました。

- 今年に入って、健康法を毎日実践している方
- 今年に入って、明日のことを過去形でイメージ出来た日があった方
- 今年に入って、自分磨きの時間をお持ちになった方

自分を磨くという考え方は非常に良うございます。

前回ご紹介した天風先生のクンバハカをやってみましょう。肩を上げて、下ろした瞬間に肛門をキュッと締める。これは、とんでもない事態が起きた時、上手く切り抜ける秘訣です。

一言にして邦を喪すもの

では論語の解説を致します。本日は子路篇十四・十五です。

【十四】冉子 朝より退く。子曰く、何ぞ晏きやと。対えて曰く、政有りきと。子曰く、其れ事ならん。如し政有らば、吾を以いずと雖も、吾其れ之を与り聞かんと。

冉有はこの時 39 歳、季氏に仕えて宰相となって実力を発揮している時期です。孔子は 68 歳ですから、自分が国政に参画することを諦めて、弟子に期待して育てようとしています。

冉有が朝（宮中の広場で毎日行われる早朝の会議）から帰って来ました。

孔子が「どうしてこんなに遅くなったのか。」と聞きました。

冉有が「国政の会議に出ておりましたから」と答えました。

それに対して孔子が、少し鼻で笑って答えています。「お前が出ているのは季氏という個人的な家の会議で、国家の政事ではない。本当に国の一大事であれば、たとえ引退した身であっても私が呼ばれないわけがない。」

国難の一大事のような場合は当然、有識者が呼ばれます。孔子は、自分が呼ばれていないということは大した問題ではない。お前は季氏の家の中で起きている問題に呼ばれただけなのだから、国政などと大きな口を叩くものではない。お師匠さんの愚痴も入りつつ、(季

氏のように) 名分を正しくしていない所で仕事などしてはいけない、というたしなめも入っています。

【十五】定公問う、一言にして以て邦を興すべきもの諸れ有りやと。孔子対えて曰く、言は以て是の若く其れ幾すべからず。人の言に曰く、君為ること難く、臣為ること易からずと。如し君為ることの難きを知らば、一言にして邦を興すことを幾せざらんやと。曰く、一言にして邦を喪すもの諸れ有りやと。孔子対えて曰く、言は以て是の若く其れ幾すべからず。人の言に曰く、予君為ることを楽しむ無し。唯その言いて予に違ふこと莫きなりと。如し其れ善にして之に違ふこと莫くんば、亦善からずや。如し不善にして之に違ふこと莫くんば、一言にして邦を喪すことを幾せざらんやと。

定公は魯の国の君主ですが、氣短かな人物だったようです。定公に孔子が仕えたのは五十代ですから、まだ脂がのっている頃です。

定公が孔子に聞きました。「ほんの一言で国を興すような、素晴らしい言葉はあるだろうか。」

孔子が答えました。「一言で国を興すような効果を期待する言葉はありません。しかし昔の人の言葉に『良い君主になることは相当難しい。良い家臣になることもかなり難しい』とあります。もしあなたが本物の君主になるのは難しいものと分かって国事に精励すれば、この言葉こそ、国を興す効果を期待できるのではないのでしょうか。」

例えば、殷の紂王は妲己の提言を聞いて酒池肉林し、国を滅ぼしてしまった。このように君主の仕事は難しいものと歴史に学んでいれば、あなたも国を更に発展させることができなわけはないでしょう。あなたはもう少し学びなさい、と孔子が定公を諭しています。

更に定公が聞きました。「一言で国を滅ぼしてしまうようなものはあるだろうか。」

孔子が答えました。「一言で国を滅ぼすような言葉はありません。しかし昔の人の言葉に『私は君主になって他に楽しいことはないが、ただ私が言ったことに臣民が背かずに行うのは楽しい』とあります。もしあなたが臣民のためになる良いことを言い、家臣がそれを実行するのであれば結構なことです。しかし道理に外れるようなことを言い、家臣がそれに背かずに行うれば、国が滅びることになるでしょう。」

自分をきちんと磨き、学んでレベルアップなさいと言っています。定公は自分の能力を過信して家臣の批判や忠言を聞くのを好まなかったようですから、言い方を換えると、あなたは少し問題があるからよくよく自分を省みなさい、と苦言を呈しているわけです。

「予 君為ることを楽しむ無し」・・・二代目、三代目で急に社長になったような場合は、社長になっても楽しいことはないと思うようです。自分が創業者で会社を興したのであれば、そういう台詞はなかなか出てこないと思います。

「唯 その言いて予に違ふこと莫きなりと」・・・普通は、社長がああしろ！こうしろ！と言ったら社員が逆らわずに動いてくれると解釈しますが、それだけではありません。この頃の君主ならば、家臣の家に出かけて娘を見初めれば側室に出来ました。そういうことも踏まえて読むと解釈の幅が広がります。

論語を現代に置きかえれば、たいして変わらないことをやっていますね。大韓航空会長の娘で元副社長が飛行機に乗って、ナッツが袋入りで提供されたのに激怒して責任者を降ろさせた。ナッツリターン問題が騒がれています。中国では、政治家のトップクラスの人達が兆の単位で賄賂を貯め込んで、外国に隠し預金をしています。習近平の権力闘争はそういう闘争を展開しているわけです。日本は団扇を配ったくらいで裁判沙汰になるのですから、桁が違いすぎます。

何度も申しますが、論語は現在の社会・現在の世界情勢に置きかえて読みこなすことをお勧め致します。

新聞の見方

最近の新聞は、本当に信用するに足りぬと感じます。ただ、ヒントはかなりあります。ですから新聞は一紙だけ見るのではなく、二紙、三紙見ることをお勧めします。そして氣になった記事は切り抜いておくとか、メモしておくことです。すると、一ヶ月とか二ヶ月、或いは数か月経つと、氣になった記事が融合します。そういう読み方をして欲しいと思います。では、ここ数日で私が氣になった記事を申します。

○電話閣議決定拡大へ ― 政府、グレーゾン事態に即応 (1/15 日 読売新聞)

日本の国が外国から武力攻撃を受けた場合、今、日本の自衛隊は応戦出来ません。どう対応するか、閣議決定してからでなければ何も出来ません。その間に終わってしまうじゃないか！ と批判が多いわけです。この記事を見て怖いと思う点は、電話による閣議決定で、連絡が取れなかった閣僚からは事後的に了解をとるという部分です。電話をかけて繋がらなければ、後で了解をとれば良いわけです。具体的なグレーゾン事態とは、国籍不明の武装集団による離島上陸や外国軍艦による日本領海内での徘徊、外国艦船による日本の民間船舶への不正行為等々を挙げていますが、いくらでも出て来ます。閣議決定で止まっていたものが、なし崩しに変わったという内容ですから、これは大変な重みを持ってい

ると感じます。

○ベルギー、組織拠点一斉摘発 (1/17日 日経新聞)

フランスの隣国ベルギーでは、イスラム過激派の拠点十二カ所を一斉に捜索、銃撃戦で二人が死亡したほか、国内外で十五人を拘束。ドイツも捜査を強化しているとあります。テロが具体的に始まっているという記事です。日本も起りうるということです。

○フランスの風刺画問題 (1/16日 読売新聞)

フランスの風刺画問題についての社説記事です。新聞のいい加減さをつくづく感じました。「テロに屈しないという意思表示だろう。だが、イスラム教徒を刺激し、新たな対立の火種とならないか懸念される」とあります。「意思表示だろう」とは、取材していないわけです。「懸念される」と、自分が勝手に想像して書いているだけです。

更に、「政治週刊誌の風刺画が、穏健なイスラム教徒の信仰心を傷つけたことは確かだ」とあります。誰かに取材したのでしょうか。「確かだ」と断定していますが、どこにその根拠があるのでしょうか。

社説の最後は「テロを封じ込めることが、焦眉の急だ。風刺画が引き起こす対立が、その妨げとなる事態は避けねばならない」と終わっています。自分は言っているだけで、具体的な実行はありません。上から見下ろしているだけの台詞です。何という無責任な社説を書くものかと思います。実行がなくて口先だけの新聞がまかり通っていたら、日本の国はどうなるのか、これによって動かされた人たちはどうなるのでしょうか。

○認知症疑い運転者、要診断 (1/15日 読売新聞)

七十五歳以上の運転者が免許更新時に認知症の恐れがあると判定されたら、医師による診断を義務付ける、とあります。認知症で交通事故を起こす人が増えているから、七十五歳以上は問答無用で運転させないようにします、という警察の意思表示だと捉えました。

○スイス「安全通貨の乱」― 異例の介入政策、突如終了 (17日 日経新聞)

スイス国立銀行が無制限の為替介入政策を終了したことによって、ユーロ大幅安、日本は円高・株安、とあります。この記事の意味する所は、資本主義は終わっているということです。金が金を生む時代は終わっています。金利で金が稼げなくなっているから、今までの金の動かし方は通用しません。これから、こういう類の記事はたくさん出て来るはずですよ。

お時間になりました。新聞を読む時には、是非、今まで自分が読んでいたものと照らし合わせる。それによって自分自身の判断基準で判断してください。新聞に書いてあるものは、眉に唾をつけて、本当なの？ どこに証拠があるの？ と考えながらお読みください。有難うございました。